

曇摩難提訳「増一阿含経」の 現存経について

割田 剛雄

一 増一阿含経の翻訳者については曇摩難提訳出説と、僧伽提婆改訳説とがあり、従来、難提訳出本は散佚してしまつたとされた。水野弘元博士はこの散佚してしまつたと言われる曇摩難提訳「増一阿含経」のうちの幾つかを、他の訳出者の名のもとに、単独経典として別出されて現存していることを論証され、初め十七経を示され、近年刊行された国訳一切経「増一阿含経」の解説のなかで、更に「八閼齋経」を加えられ、合計十八経とされた。

博士はその論証の論拠として、①「経律異相」の中に増一阿含経として引用された十五例のうち、四例のみ現存の「増一阿含経」に相当経を見出し、他の十一経は見い出せないこと。曇摩難提訳とみなされる「中阿含経」には共通の独特の経典形式があり、〈その独特の形式というの経首が「聞如是一時、婆伽婆、在……」で始まり、経末が「聞世尊所説、歡喜奉行」で終つてゐることである〉¹⁾と指摘され、続いて、〈殊にこのような経末を有する経典は、この一類経以外には、一切経数千の經典中に全くその例を見ないものである〉²⁾とされ、「増一阿含経」の場合にも、同じく共通の独特の訳語訳風、〈聞如是、一時婆伽婆、在……〉で始まり、「聞仏所説、歡喜奉行」で終つてゐるのである。②更にこれらの相当

諸経がいずれも曇摩難提訳とされず、安世高や竺法護等の訳者名形で現行しているのは、出三藏記集以下の信頼すべき諸経録では、訳者不明の失訳経とされているのに、長房録あたりより、他の訳者名が付与され、今日にいたつてゐるためである、とされた。

こうした論拠に合致する経典として、前述十八経が曇摩難提訳「増一阿含経」の現存経として、示されたのである。

二 ところで、この水野博士所論の論拠を満足するものとして、更に二經典が加えられるべきと思われるのである。即ち、法炬訳「群牛譬経」一卷と、曇無蘭訳「大魚事経」一卷とである。

法炬訳「群牛譬経」(大正蔵④八〇〇b-c)の経首および経尾は「聞如是、一時婆伽婆、在舍衛城、祇樹給孤獨園……聞仏所説、歡喜奉行」であり、經典形式の訳語訳風が合致する。

訳出者が法炬に比定されるまでの変遷についても、出三藏記集巻四、新集統撰失訳雜経録第一では

群牛譬経一卷
抄阿含³⁾

と示され、何阿含経の抄であるのが未詳だが、阿含経典の一部であることだけは僧佑も認めていた訳である。法経録巻三異訳の部では、群牛譬経一卷その他をあげたのち、〈右十八経並是増一阿含別品異訳〉として、訳者は示さず、増一阿含経の異訳經典であることのみを明記している。

この点に関して附言すれば、この法経録の記載の時点で、既に別の纏つた形での「増一阿含経」が存在したからこそ、異訳単経として群牛譬経が記載されたと言ひ得るわけであり、その纏つた形の「増一阿含経」とは、とりもなおさず、僧伽提婆改訳「増一阿含

經」でなければならぬ。

彦琮録卷二でも法経録の記述を継承し、訳者未詳、増一阿含別品異訳としている。

ところが内典録卷二になると、法炬訳出経のなかに「群牛譬経一巻 出阿含」として、始めて翻訳者を法炬にあてているのである。

そして武周録卷八、開元録卷二ではいずれも法炬訳出経の項目中に入れ、両録ともに、長房録によつたと明示している。

曇無蘭訳「大魚事経」(大正蔵④八〇〇c・八〇一a)一卷についても同様のことが言える。即ち、「聞如是、一時婆伽婆在舍衛城……聞仏所説、歡喜奉行」とあり、訳経録についても、出三蔵記集卷四・新集統撰失訳雜経第一⁽¹⁾でも、法経録卷三、彦琮録卷一⁽²⁾でも失訳経とされている。しかるに内典録卷三において、はじめて曇無蘭訳出経のなかに数えられ、以後、武周録卷七、開元録等において、いずれも曇無蘭訳出経として長房録の訳者決定を継承し、それが今日にいたつているのである。

以上の如く、群牛譬経と大魚事経の二経は、信聞時主の四成就に ついての曇摩難提独特の訳語訳風があること、更に、当初、訳者未詳とされながら、年代を経たのちの長房録になつて、それぞれ法炬訳、曇無蘭訳とされるに至つた変遷の過程は、水野博士所説と全く同趣のものである。これら二経が博士所説の論拠を満す意味で、曇摩難提訳増一阿含経の現存経典の一つとして、先の十八経に加えられ、研究の対象とされるべきものと思われるのである。

三次に敦煌出土のスタイン本のなかに、曇摩難提増一阿含経という經典名が見い出されるといふ問題がある。即ち斯坦因劫経録 No. 3288⁽³⁾に「増一阿含経七日用品第卅八卷卅四前曇摩難提」とある。

曇摩難提訳「増一阿含経」の現存経について(割田)

しかし残念ながら、内容を検討すると、經典の前半は明らかに密教系の内容であり、フィルム No. 106 の個所に、(金剛頂瑜伽念誦軌儀竟)と示され、(残りフィルム)コマ分が他種經典の断片となつて いるが、これも般若波羅蜜、忍辱波羅蜜等が説かれ、増一阿含経の断片とは思われない。更に増一阿含経七日用品第卅八云々の經典名が 九行続けて書かれている点などからして、どうも、經典名を列挙し ただけと思われる。従つて、積極的な資料とは言えないけれども、 少くとも、敦煌本所収のこの時点では曇摩難提の名前のもとに流布 していた増一阿含経があつたことのみは知られるのである。そして 注意すべきことは、現存増一阿含経中の七日用品は(七日用品第四十の 一、卷三十四⁽⁴⁾)であること、スタイン版の記述と巻数では合致しつ つ、数え方が相違しているのである。

更にスタイン版所収の増一阿含経断片は他にも、No. 3280, 0495, 4010, 5681 等が見い出されるが、これらはいずれも大正蔵所収本に 完全に一致している。

- (1)・(2) 「大倉山学院紀要」第二輯七一頁。(3) 同八二頁。
- (4) 大正蔵⑤三〇頁下。(5) 大正蔵⑤二二九頁中。
- (6) 大正蔵⑤一六〇頁中。(7) 大正蔵⑤二三八頁中。
- (8) 大正蔵⑤四二二頁中。(9) 大正蔵⑤四九九頁下。
- (10) 大正蔵④八〇〇頁下―八〇一頁上。(11) 大正蔵⑤二七頁中。
- (12) 大正蔵⑤一三二頁上。(13) 大正蔵⑤一五四頁下。
- (14) 大正蔵⑤二四五頁中。(15) 大正蔵四一一頁下。
- (16) 大正蔵⑤五〇三頁下。(17) 大正蔵②七三五頁中。